金襴緞子 妖奇譚

おに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
金襴緞子　妖奇譚

【Ｎコード】
Ｎ５１３６Ｖ

【作者名】
おに

【あらすじ】
『きんらんどんす　あやかしきたん』妖の姫である「しづる」はある日、社の水鏡から突然異世界に飛ばされた。妖であるしづると、たまたま居合わせた子狸が混ざり合い、狸の耳と尻尾を持つイタイ少女の姿に囚われる羽目に。何事もあるがままに受け入れる主義の中年差しかかり男に拾われ、現世での生活を始めることに。年齢差あり（？）の、現代を舞台としたほのぼの逆トリップものです。

第1話　はじまりの出会い（前書き）

のんびり、中篇予定です

第1話　はじまりの出会い

綿毛、綿毛、わらわも乗せて飛んでおくれ。

春の野原にごろんと転がれば、青い空を自由に飛び立つタンポポの綿毛。

どれだけ眺めても、小さな種と代れることもなく、どれだけ溜息をついても、吐息はふわふわの綿毛を風に乗せてやれるだけの力しかない。

風に乗って飛んできたのは、自分の名を呼ぶ声。

少し長居をしすぎた。

むくりと起き上がり、着物の裾を直して草と綿毛を払い落とす。

「わらわはここじゃ」

振り返ると、小さなしもべが丘を駆け上がってくる。

「お探ししました、しづる様」

肩で息をつき、大きな丸い尻尾を振りながら、その者は着物の袖で汗をぬぐった。

途中で転びでもしたのだろうか、短い裾からみえる膝には擦り傷がある。

「十鼓（とおこ）や、転んだのか……相変わらず抜けておるな」

ぴくぴくと頭に生えた丸い耳は、主の言葉を聞き漏らさぬよう、よく動く。

「とおこは強いので大丈夫であります」

満面の笑みで応えられ、仕方がないのう、と袂から手拭いを取り出ししゃがみ込むと、手早く傷口を縛る。

「ありがとうございます、しづる様」

小さな従者に知らずと笑みがこぼれる。

しづるは桜色の着物の裾を払いながら立ち上がると、十鼓を伴ってたんぽぽの丘を下りてゆく。

「わらわを探しておったと言ったな、十鼓や」

「はい、ご母堂様がお呼びでございます」

「母様が……？」

足を止めた。

急に立ち止まった主の横で、生い茂る草に足を滑らせ危うく坂を転がりそうになった十鼓が振り返る。

しづるは咄嗟に表情を明るく取り繕い、小さな従者に微笑みかけた。

「のう十鼓や、お前は先に屋敷にお戻り。わらわは井戸で清めてから行くゆえ」

ほら、と先程たんぽぽと戯れたせいで汚れた手を見せると、首を傾げていた十鼓がほっとしたように笑顔に変わる。

「分かりました。では、十鼓が先に戻りご母堂様にそうお伝えしておきます」

茶色のふさふさした尻尾を揺らしながら、可愛い従者は来た道を転がるように駈けていった。

しづるはそんな子狸を見送りながら、表情を翳らせ溜め息をつく。

しづるが立つのは井戸の側でも馴れ親しんだ屋敷でもなく、杜の神を祀る社の中だった。

社の中心には、人がすっぽりと入れる程の大がめがひとつ。

四方をしめ縄で祀られたそれには、清められた水が満たされている。

そっと覗き込むと、若い女の顔が映る。

長く伸びた黒髪はほのかに茶色がかってゆるく巻き、白い肌は滑らかで艶があり、大きすぎず愛らしく開く両の眼は黒目がちで、少しだけ不安を浮かばせていた。
しづるは自分の容姿があまり好きではなかった。
父に似て平坦で派手さとは無縁の、あっさり顔。
そこに居るだけで華やかさをもたらす、艶やかな母とは似ていない。似てるのはこの髪くらいのもだ。

軽く溜息をついて水鏡を再び覗き込めば、そこにはしづるの意思を汲み取ったかのように映る、母の姿。
母は屋敷で、幼い弟を愛しげにあやしていた。
しづるはその姿に微笑み、そして眼を背ける。

未だヨチヨチ歩きの可愛い弟。
守ってやりたい。
だが……疎ましく感じるこの気持ちは何なのだろう。

そう自問していると、急に水瓶が光を伴って溢れ出す。
「な、何事じゃ……？」
瞬く間に光に満たされ、社の中は真っ白になる。
「……っ」
何が起きたのか分からず、光に飲まれる。

足元が揺れる。
ふいに宙に浮いたような感覚に、前後左右、上も下も分からない。

堕ちる。
そんな感覚とともに、意識も途切れていった。

＊＊＊

「んじゃ、これ済んだら今日は終いね、お疲れさん」
男は従業員にそう告げると、書類を適当に机に仕舞って上着を羽織る。
「お疲れ様でした」
挨拶を受けて事務所を出ると、車の鍵をポケットから出して駐車場へと急ぐ。

……今日の晩飯、何にすっかな

そんなことを考えながら帰途につく。
いつもと変わらない、日常。
毎日の繰り返しだった。
別に、それでも男は満足していた。
やりがいのある役職にも就いているし、給料だってそれなりだ。
忙しいのは、優秀と認められているからだし、苦労しなくても仕事が舞い込んでくるのは、これまでこなして来た実績が間違いじゃないからだ。
男は自分の人生に、ほどほどに満足していた。
まあ、ただひとつ未だ伴侶に恵まれていないことを除いて、だが。

車を運転しながら音楽をかけようと、オーディオに手を伸ばし、一瞬だが眼を逸らせたその瞬間……

何かが暗い夜道を横切った気がして、とにかく急ブレーキを踏んだ。

けたたましい悲鳴をあげてタイヤが擦れる。

何かが当たったような嫌な感覚、とはいえ小石を跳ねた程度の感触だったが、男は万が一を考え車を降りて影が消えた草むらに目を凝らす。

郊外の夜道は思いの外暗い。

ましてやここは片側を小山、反対側は放棄された田んぼらしき荒れ地だった。

ヘッドライトを明かり代わりに、草むらをかき分けるとソレは無造作に横たわっていた。

「ああ――やっちまったか」

どうにも後味の悪い想いが胸に押し寄せる。

男はソレの側にしゃがみこむと、既に息絶えたのかピクリともしない首元に手をやる。

「死んじまったか？こんな小さいんじゃ、まだ独り立ち前だよな……」

目立った出血があるわけではないが、くったりとした子狸を拾い上げると、トクンと鼓動を感じた。

「……助かるか？」

一瞬考えたが、まあなるようになるだろう、と何時ものように考え、子狸を病院に連れて行くことにした。

男は手に子狸をそっと抱え、立ち上がろうと顔を上げて、目の前の光景に息を呑む。

ヘッドライトだと思っていた明かりが、何故か三つに増えていた。

いやいや、真ん中のひとつが異常に激しく発光しながら、目の前に降りてくる。

呆然と光の中を見ていると、男はソレを見つけて唖然とした表情を浮かべる。

だが光の体積はどんどん増していき、男は目を開けていられないほどの眩しい光に、手をかざそうとしたのだが、その手には傷ついた子狸があり、間抜けなことに光の中に子狸を差し出す形になってしまった。

目の前の光源に中てられ、眼が眩み、失明でもしてしまうのではと不吉な事が頭をかすめたのだが、次の瞬間には、辺りは元の闇夜と二つのヘッドライトのコントラストに戻っていた。
何が起きたのか分からないが、二、三度頭を振って我に返ると、手には抱えていたはずの子狸が無い。
冗談だろ、今時化かされたのか……などと思って苦笑いする。

そして、再び目の前のソレに息を呑む。

子狸、いやいや、小娘？
「どうすっかな、コレ」
ちんまりとした子供が朱色の着物を着て倒れている。
子供、というか……
何の、コスプレ？

狸の耳に、丸いふさふさの尻尾って。
「おーい、生きてるか？」
丸くなって倒れている着物の少女を覗き込み、先程の子狸と同じ要領で脈を確認すると、確かな鼓動に心底安堵する。
少女はしっかりとしたリズムで寝息をたてており、起きる様子は全く無い。
「これ、本物か？」
丸い耳を軽く引っ張ってみたのだが、小さな頭もクイクイとそれにつられて揺れる。
がっくりと項垂れる男は、大きく溜息を漏らす。

「なんで俺が、日本昔ばなしな状況？……ナンかしたか、俺？」
はあ、ともうひとつ溜息をつくと、徐に少女を抱き上げ、車に運ぶことにした。

すれ違う車もない田舎道、叫んで助けを求めたい気持ちを抑えつつ、男は暗い丘を越えた向こうの自宅のある街へ向かい、車を走らせるのだった。

第2話　異界

身体が軋む。
起きぬけに感じたのは、それから眩しいとか、そんな事だった。
何だか狭い部屋に閉じ込められ、粗末なちょっと汗臭いベッドに寝かされていたようだ。
壁に沿って木箱が置いてあり、更にその上には怪しい黒くて薄い板が飾られている。
更にその横には机と見たことない変わった椅子。机の上にはまたしても、黒い板に四角い升目の細長い物……？
「一体、どこじゃ此処は？」

狭さから、此処は捕虜でも収監する牢かなにかであろうと判断し、しづるは溜め息をついた。
ふと、寝台の脇に窓が目に入る。
妙に細長い硝子の向こうに、同じように粗末な寝台のが見え、寝台に腰掛けて此方を伺うような小さな娘と目があった。
――わらわと同じように囚われているのか？だがそれにしても幼い――。
小さな娘は１０才にも満たないだろうか……朱色の着物を着た、茶色の猫毛の長い髪からは、可愛い　丸い耳をピクピクと覗かせている。くるりとした大きな眼は此方を興味深そうに見つめる。
しづるがそっと近づくと、その者も合わせたかのように近寄ってきた。
――？
そっと立ち上がって手を当てると……
「っか、鏡？」
ではこの目の前の小娘は……
華奢な手足を見て、目の前の幼子の正体に気付く。

「ぎゃあああっ」
毛が逆立つ。
耳がぴくぴくと動く。
短い指――

「なんじゃ、これは！」

ガタガタン、と激しい音がして鏡の横の扉が開く。
「何だ、どうした？」
顔を出した男と、目が合う。
目いっぱい開いた目と口をヒクつかせながら、しづるは気が遠くなる。
ふらり、と自分が後ろに倒れていくのを感じながら、座敷牢の景色が反転してゆくのをぼんやり眺める。そしてほどなく受けるであろう衝撃を、背に感じるのを待っていたのだが、いつになってもやってこない。
代りに温かい大きな何かを背中に感じ、何故だろう？と薄目を開けると、すぐ目の前に男の顔。
「ぎゃあっ」
あまりに驚いて、ついばちんと平手を食らわせていた。
「なんじゃ、そちは？は、離せ無礼者！」
暴れるしづるを、男は苦い表情でそっと寝台に下ろした。
まるで野良猫のように尻尾の毛を逆立てて睨みつける。そんな様子に怯みもせずに、男は膝をついて寝台の下からまっすぐ見返してきた。
「ここは、俺の家だ。お嬢ちゃん、どこか痛いところとか、気分は悪くないか？」
しづるは、まじまじと男を観察する。

くたびれたシャツに、ジーパンという『しづる』にとっては見たことも無い格好の男。薄っすらと生えた無精ひげは、ことさら見苦しい。まあ、いわゆる中年さしかかりの男は、きっとこの座敷牢（勝手に決めつけた）の看守に違いないと、これまた勝手に結論づけた。

「べつに、痛くもかゆくもない。ここは何処じゃ。わらわを捕らえてなんとする？」

看守ごときにこのような問いは詮無いこと。しかしこの何もかも見知らぬ物に囲まれたところにあっては、問わずにおれなかった。

「……捕らえたって、いやそんなつもりは無いんだけどね。お嬢ちゃん、名前なんての？」

フウウッと再び毛が逆立つ。

「無礼者、人に名を尋ねるときはまず己からであろう」

男は悪びれもせず、首をかしげてからああ、と笑う。

「そうだったな悪い悪い。俺の名は、二宮征隆（にのみやまさたか）。きみは？」

素直に答えたのは意図してではなく、なんとなくな拍子でだった。

「しづる……我は鵺（ぬえ）一族が長の一姫、詩鶴（しづる）じゃ。……我が名を知らぬ者がなぜ、わらわを捕らえる？」

はて、と考え込んでいると、征隆と名乗った男が苦笑いを浮かべる。

「だから、捕らえてないって。昨夜のこと、やっぱ覚えてないんだな」

ぼりぼりと頭を掻いて、目線を初めて外された。

「ここは、俺の家。昨夜偶然、きみを拾って……」

男の話も聞き終わらぬうちに、しづるは慌てて窓に飛び寄る。

そこは見たこともない景色。

四角い縦に大きな建物が立ち並び、所狭しと無数に立てられた柱に黒い紐が通され、あちらこちらに繋がっている。道は土色ではなく、灰黒い。そこをもの凄い速さで、怪物のようなものが走り去る。

知らない風景、知らないひと。知らない……

いや、知っている。
正確には、聞き及んでいる。
しづるは、震える唇で呟く。
「……異界……」
そう、母様から幼い頃より聞かされていた。しづるたちの住むところとは、似て非なる世界。だが、決して離れることができない、双子のように干渉しあう『地球』という世界。
しづるは目を見開いたまま、しばらく動くことが出来なかった。

第3話　速まる鼓動

「とりあえず、腹減ってないか？」
征隆（まさたか）と名乗った男は、しづるの苦悩を無視したかのように笑顔で尋ねる。
「え、あ、腹？」
しづるがそう聞き返した途端、盛大な腹の虫が鳴る。
「――ぷ、くくく……」
「な、しし失礼ではないかっ、これはその……」
赤面して言い訳をしようと口をぱくぱくさせるしづるを放置し、男は先程入ってきた扉の向こうに消える。
やるせない思いを持て余し寝台の上で悶えていると、男は好い臭いのする盆を抱えて戻ってきた。
「朝飯、食おうぜ……あんた、あいや、しづるの口に合うといいんだが」
小さな卓の上に、平らな皿に載った食材を並べはじめた。
「なにぶん男の独り暮しだから、気の利いたものはないんだ」
苦笑いで差し出されたのは、目玉焼きと温めた牛乳、それと……
じっとそれを見つめるしずるに、首を傾げる。
ああ、と合点がいったようで、それの名を教えられる。
「ぱん……これが」
「食べたことないか？」
しずるはこくんとひとつ頷いた。
「話には聞いたことがある、子供の頃に母様が聞かせてくれた。蒲の穂みたいにふわふわしてて、でももっと美味しいって」
思わず零れた笑顔で視線を振り上げると、同じように微笑むひと

と目が合う。
「小さい頃ね」
言われて改めて、しずるは己の小さな手と身体に気づき、誤魔化すように視線を外す。

「とにかく、食べよう」
征隆は、手を合わせさっさと食べ始める。
しずるもまた後を追うようにして、見よう見まねで『ぱん』に手をつけた。

「美味しい」
溜め息のようにもれた言葉に、当のしづるのほうがびっくりして口を押さえる。
「口に合ってよかった」
微笑まれた。

二人は小さなテーブルを挟んで向かい合い、黙々と朝食にありついていた。
しづるは甘くて温かいミルクに口を付けながら、向かいの男を観察する。

これが、人間。
目の前の男は、しづるの良く知る世界ではあまりいない短髪で、顔つきは父と同じで彫りは浅く、でもはっきりとした目鼻立ちでよく言えば整っているほうなのかもしれない。しづるにとって男性の比較対象があまりいないので何とも言えないのだが。落ち着いた表情と仕草のなか、しっかりとした低く通る声のせいか、鋭さも感じられる男だった。
容姿も言葉も自分たち妖とあまり変わらない。いや、厳密に言えば『今』の自分とはちょっと違うのだが。

遠く故郷で母がいつも聞かせてくれていた。人間のこと、この異界のこと。つまりはこの双子のように干渉し合っている二つの世界の違いを、まるで子守唄を聞かせるように、ときに童話を寝床で読み聞かせるように母は教えてくれた。
いつかしづるも母のように、苦もなく世界を渡る日を迎える準備として――

しづるは耳をぴくぴくと動かし、ふさふさの尾で床をひと撫でする。
征隆はさっさと食べ終わり、香ばしい香りの珈琲とやらを啜っていた。
彼の視線にそわそわと毛が逆立つのは、何のせいだろう。
いや、そもそもなんでもさもさの耳と尻尾があるのだろうか、と今更なのだが焦りで冷や汗をかく。

「あ、あの、わらわは何故ここに？」
最後のパンにかぶりつきながら、昨夜いったい何があったのかを聞かされた。

征隆から見たしづるとの遭遇。それは妖としてのしづるにとっても、かなり特殊な状況だった。
光の中から出てきたしづると、その中に差し出す形となった傷ついた子狸。光が爆発的に膨れ上がり、収まったとき残されていたのは、今のもふもふな耳と尻尾の、幼子となったしづるひとりだったという。

――融合。いや、同調か？
しかも、片割れは死にかけている。
しづるはようやく朝飯を飲み込んで、背筋を伸ばす。そして小さな胸に手を添え、目を伏せる。

次の瞬間、淡い光がしづるを包む。
征隆は昨夜の目映い光景を思いだし、息を飲む。
また何か起こるのかと身構えるが、昨夜とは違い淡い光は徐々に消えていった。
目を開けたしづるの表情が、僅かに曇る。
「狸の子供だ、死にかけていたから、すんなり融合してしまったらしい。確かに小さな命が此処にある」
胸に添えた手を握る。
「その子狸は、どうなっちまうんだ？死にかけたのはやっぱり、俺のせいだよな……」
「死にはしない。恐らくわらわの中で傷を癒し、生命の危機を脱すれば、分離は可能であろう」
征隆がその言葉を聞いて、あからさまに安堵の溜め息をついた。
しづるは、それを見て不思議に思う。
「わらわも助かる。不意であった故、姿が子狸に引き摺られこの成り」
「ああ……やっぱりそれが本当の姿じゃないのか」
呟くように征隆は言う。
「わらわはこんな子供ではない。これはいささかも本位ではなく……」
黒い瞳でじっと見つめられると、どきりと高鳴るのは――誰の鼓動？
わらわか？

それとも、もの言わぬ小さな子狸のものか――

どちらにしろ、毛穴が開いたようなくすぐったさと早鐘のような鼓動に、内心うろたえる。

そんなしづるの心を見透かしたように、征隆がしづるの茶色い頭をそっと撫でた。

「悪いんだけど、これから俺仕事にいかなきゃならないんだ。夕方には帰ってくるから、ここで大人しく待っていられるか？」

「え……？」

途端に不安が押し寄せる。

「昼に人を頼んで様子をうかがわせるから、さ？」

――人？

あからさまに不安な顔をしていたのだろうか、征隆が申し訳なさそうに眉を下げた。

「帰ってきたらまた、詳しく話そう。これからどうするかとか……その耳もそうだけど、何より子供の姿のままじゃ、ここでは一人ではどうにもならないからね」

正論だと思った。

しづるにも、正直これからどうやって元の世界に戻れるのか、全く分からないのだ。

それに、この身の内に眠る子狸も放ってはおけない。

「わかった……ここで待つ」

「そうか、ありがとう」

征隆はほっとした表情で笑った。

また、しづるの鼓動がとくんと跳ねる。

――何なのだろう、これは。

そういえば、この征隆のことを何も聞いていなかった。

戻ってきたら、聞きたいことは山ほどある。

いくつかの注意事項を伝えながら、征隆は『仕事』とやらへ出かける支度をはじめる。
しづるは興味津々でスーツとネクタイとやらを眺め、鍵でひととおり遊んでから部屋の主を見送った。
その際教えてもらった『てれび』という物にしづるは非常に惹かれ、目まぐるしくチャンネルを変え、口を半開きにしたまま眺めていた。
気付くと、約束の昼までずっとテレビの前で、時間を過ごしていたのだった。

第四話　華と握り飯

夢中でながめた『てれび』とやらは、目まぐるしく鮮やかな景色と、この異界の不思議な常識をしづるにもたらしてくれた。

場面が変わったと思ったら、眩しく点滅する光に晒された男女が夫婦の契りを結んだとかで、丁寧に挨拶をした。それはめでたいと頷き祝福を返そうかと思えば再び場面が変わり、男女の別れるだのよりを戻すだのといったやり取りが、酷く情緒あふれる音楽をかなでつつ繰り広げられた。その若いおなごに「それは甲斐性なしだからやめておけ」、と伝えたにもかかわらずよりを戻して、再び博打におぼれた男に縋りつかれおった。

――つ、疲れた。

ひとしきりチャンネルとやらを変えて堪能したのち、しづるは大きく溜息をついてベットに沈む。

まだ1日とたってないが、故郷の家族を思い出されて切ない。

心配していてくれるだろうか。

父と母は自分がいなくなって、悲しんでくれているだろうか。まだ幼い弟は姉を捜して泣いているのではないだろうか。そして十鼓……最後に共にいたことで、責任を感じてしまっていたらと申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

恐らく母は気がついているのではないだろうか。

しづるが異界に落ちたことを……。

物思いにふけっていると、突然隣の部屋にある玄関が開く音がした。
しづるは征隆が帰ってきたと思い、咄嗟に起き上がって固まる。
――臭いが、違う。
ビクリと身体が震えて警戒に毛が逆立つのを感じる。
「だ、誰だ？」
勝手に息をひそめて小声になるのは、狸のせいだろうか。まるで自分以外のものに身体を使われているかのような違和感だ。

そんなしづるの緊張を知らずか、いきなり部屋の戸が開き見知らぬ女が顔を出した。
「あら、ここにいたのね。お昼、もってきたよお腹すいたでしょう、お嬢ちゃん？」
顔を覗かせたのは、本来のしづると同じくらいの背格好の若い娘だった。髪は短く明るい茶色で、顔つきは幼げなのにしっかり施された化粧は派手で、バサバサと音をたてそうな、やけに大きな睫毛は童顔をさらに強調させている。
さらに驚くことはその服装だ。胸元をわざと見せるかのような薄手の上着に、太ももを丸出しにした短いはきもの。
膝までの長い足袋は何のためだ、娘よ。なぜ肝心な太ももは出したままなのだ！
観察から突っ込みに変わるあいだ、しづるの口はだらしなく開きっぱなしだった。

「ねえ、大丈夫？」
突然の訪問者に声をかけられ、しづるはようやく我に返る。
「あ、ああ。大丈夫……デス」
「そう？　あ、あたしは華っていうの。お腹すいたでしょ、待ってて」
にっこり笑うと、手に持った袋を持ち上げて見せる。それを机に

置いて、好きなのをしづるに選べと言い残して台所に消えた。
　しづるが袋を覗くと、中には朝も食べたパンやら握り飯やらいくつか入っていた。それを見たら、またしても恥ずかしげもなく腹の虫が鳴る。
「あはは、なんなら全部食べてもいいよ、え……と、しづるちゃんだっけ？」
　両手に飲み物を持って、華が戻ってきた。
「あの……あなたの分は？」
　ん？　と首を傾げた華。
「あたしは帰ってから食べるからさ。子供は遠慮しなくていいよ」
　にっこり笑って有無を言わさぬ雰囲気に、しづるは握り飯を手にとる。
　しかし、食べようにも不思議な包み紙がはがせず、食べられない。手の上で転がすばかりのしづるを見て、再び華は笑いだす。
「あっはっは！　うそ、食べたことないの？　かしてみて」
　しづるから握り飯を奪うと、あっという間に開いてみせた。
「あ、ありがとう」
　恥じ入りながらも、しづるは食べる。
　すごく、美味しかった。
「よかった、初めてみたいだけど、口に合ったみたいで」
　よほど幸せそうに食べてたらしい。

　ところで、この娘は何者なのだろう。
　しづるが握り飯をほおばりながらじっと見ていると、華はにんまりと意味ありげに笑う。
「征隆（せいりゅう）があたしに頼みごとっての、珍しいんだよね」
「せいりゅう？」
「うん、そう……あそうか、征隆（まさたか）ね。昔からせいりゅうって呼んでるんだ、音読みでね」
　ああなるほど、としづるは納得しつつも疑問は残る。

どんな関係なんだろうか。家族？　それとも友人だろうか。
「あいつはさ、何でもひとりでこなすからさ、話聞いてもう笑っちゃった。だってあいつの困った顔なんて見たことないもん」
「困った、顔？」
「そうよぉ、小さい女の子の好みとか分かんないってさぁ……これ！」
そう言うと、華は持ってきた大きな袋からいくつか服を取り出す。
「そんな着物じゃ、外にも出づらいでしょ？　だからいろいろと見繕ってやってくれって征隆に頼まれたの。んで、そんときの顔ったらさあ！」
けけけ、とお世辞にも上品とは言えない笑いが続く。とにかく面白くてしょうがないらしい。
だから、どういう関係だおまえたち。

結局、華にも時間がないとやらで適当に着替えさせられて、いろいろと台所の使い方やら教えられて、あっという間に大学とやらに帰っていった。
どうやら征隆はしづるのことを、同僚の娘だと華に説明したらしい。母親は離婚しておらず、父親は急な出張に行かねばならず、仕方なく世話を引き受けたと。それはいいのだが、出張というのは何だろう。だが華がそれで納得したのならいいかと、あえて聞かないでおいておく。
征隆が帰ってくる夕方まで、またひとりだ。
教えられたとおりにお茶を煎れ、しづるはひと息つく。
「なんだか、嵐のような娘御だったの」
静まりかえった狭い部屋で、しづるは大あくび。
眠い。
ぼんやりする頭で、身体の奥底で眠るもうひとつの命の息遣いに耳を傾ける。
すると引きずられるように睡魔に支配され、しぜんと身体を丸く

してベッドに沈んでいった。

なんだか暖かくて、気持ちいい。

ずっとこの暖かさに包まれて、安心していたい。そう思いながら夢の中にいた。

これはきっと、子供の頃を思い出していたのだと思う。だってこんな暖かさは、まだ幼くて母様に抱かれて眠っていたあの頃以来だから。弟が生まれてからは、そこはわらわの場所ではなくなったから。

惜しいわけではない。羨んでいるわけでもない。わらわは子供ではないからな。

ならばどうして、この胸はきゅうと絞られたように軋むのだろうか。

はた、と眼がさめる。目の前の光景に、しばし停止。

耳と尻尾の毛が逆立つ。

「……ななな、なにをしておる」

振り上げた渾身の平手は、ペチンと情けない音とともに男の顔に命中する。

ああ、小さくなったこの身が情けない。こんな幼子の可愛らしい紅葉のような手では、この不埒者に一矢報いることすらままならぬではないか。

いつのまにか眠っていたしづるを、抱きしめるかのように抱えて眠る征隆の頬には、文字通り赤い紅葉の跡が浮き出る。

「ん？　ああ、起きたのか」

「お、起きたのかではない！　この不埒者！」

しづるの真っ赤になった顔を見て、ようやく征隆も状況を悟ったのか腕の中からしづるを解放した。

「帰ってきたら、ベッドの上で布団もかけずに寝てただろう？　触ったらあんまり冷たいからびっくりして、とにかく暖めようと布団に入れたんだよ」
とりあえず言い訳だろうか、征隆が起き上がる。
「なら、なんでおまえまで一緒に寝てるのだ」
「んー、ほら、犬とか猫とか赤ん坊とか寝てるの見てると、こっちまで眠くなるんだよな。なんでだろう？」
「知るかー！」

征隆は、ははは と笑いながらしづるの手を取って握る。
「よし、もう暖かいな」
そう言ってすぐに手を離す。

たったそれだけのことなのに、隣に眠っていた征隆を見たときより、ずっと早くずっと強くしづるの心臓が跳ねた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5136v/

金襴緞子 妖奇譚

2011年12月18日01時49分発行